

バドミントンのサーブスキルと性格特性の関係

太田和義*・小原史朗・藤井勝紀**

The Relation between Serve Skill or Badminton and Character

Kazuyoshi OHTA, Shirô OHARA and Katsunori Fujii

The purpose of this study was to clarify the relation between serve skill on badminton and character. In 1980, long and short service skill and the Yatabe-Guilford Personality Test were administered to 82 male freshmen at the Aich Institute of Technology. Groups based on character was classified as shown in table 1. We examined the records on serve skills of each groups by using the t-test.

The following results were obtained:

- (1) Indecisive and prudent students had significantly higher records at the test of short service skill than cheerful, imprudent and reckless ones.
- (2) The students belonging to the low scores group on factor D (Depression) and factor O (Lack of Objectivity) were superior at the first half test of short service skill to the high scores ones.
- (3) The result about the factor T (Thinking Extraversion) was opposite to "(2)"

はじめに

バドミントンはバレーボール、テニス、卓球などとともに、ネットを境にしてプレーする、いわゆる「バレーボール型」の球技に属する。サーブについていえば、バドミントンのサーブは「オーバー・ウエスト」と「オーバー・ハンド」が禁じられていることなどにもよるが、「バレーボール型」の球技のなかでは最も攻撃性に乏しいという特徴をもっている。ダブルスの場合には、ショート・サービスが中心で、シャトルをネットすれすれに通過させ、ショート・サービス・ラインぎりぎりをおろす技術が要求される。また、シングルの場合には、ロング・ハイ・サービスで打ち上げられたシャトルが、バックバウンダリー・ラインの上方で失速し、ライン上に落下するのが理想的なサーブとされる。中途半端なサーブしか出せないとなると、たちまちスマッシュなどの厳しい攻撃を浴びせられ、得点をあげるのが困難となる。攻撃力が劣るが故に、テニスや卓球などと違った意味でバドミントンのサーブの重要性が強調されるのである。

教授-学習過程の最適化をはかる1つの手段として、学習者の性格特性を把握することがあげられる。本研究は、矢田部-ギルフォード性格検査(以下 Y-G 性格検査と略す)で学習者のパーソナリティを調べ、そのパーソ

ナリティの構成要素としての性格特性とサーブのスキル学習能力の関係を明らかにしようとした。性格とバドミントンのスキルの関係を究明した報告⁴⁾はきわめて少ない。この意味で本研究はバドミントンのスキルに関する学習指導を行なううえで一助となる。

方 法

I 対象：本学の正課体育実技においてバドミントンを受講した新入男子学生82名(土木科38名、経営学科44名)

II 測定項目および測定期間

1) サーブスキルの測定：昭和55年5月～7月(週1回、8週連続)

2) Y-G 性格検査：昭和55年4月

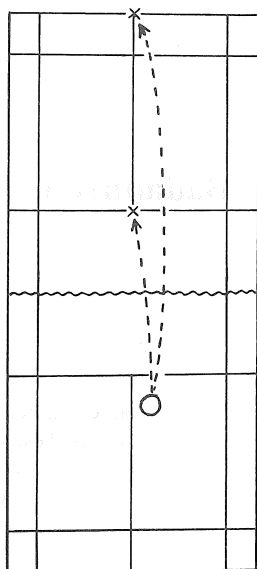
III サーブスキルの測定方法

被験者には、図1のように、右のコート内から、ショート・サービス・ラインとセンター・ラインの交点、およびバックバウンダリー・ラインとセンター・ラインの交点の2ポイントをねらって打つよう指示し、前後それぞれ3回ずつ試技させた。「イン」と「アウト」の区別は考慮せず、ポイントから何cmはずれたかを記録することとした。なお、ショート・サービスの際には、できるだけネットの上部近くを通過させることを意識するよう

*名古屋市立大学教養部

**愛知工業大学非常勤講師

図1 サブスキルテスト



指示したが、測定の際にはとくに高さについて制限を設けなかった。

IV 性格因子の分類

Y-G 性格検査の結果から、性格特性を示す12の因子、(D), (C), (I), (N), (O), (Co), (Ag), (G), (R), (T), (A), (S)について、その得点の大小によって、性格特性の明確化している高得点群と低得点群とに分類した。この分類の基準は、「標準点」5と4の枠内に入るスコアのもを高得点群、「標準点」1と2に入るスコアのもを低得点群とした。それぞれの因子ごとの高、低得点2群の分類基準スコアは表1のとおりであった。

表1 因子の高得点群と低得点群の分類基準

因子	低得点群	高得点群	因子	低得点群	高得点群
D	0～8	15～20	Ag	0～8	14～20
C	0～7	13～20	G	0～8	14～20
I	0～5	13～20	R	0～7	13～20
N	0～6	13～20	T	0～5	11～20
O	0～5	11～20	A	0～4	12～20
Co	0～6	11～20	S	0～6	14～20

結果と考察

被験者の性格類型別の人数の内分けは表2のとおりであった。最も多数であったのはD類型で全体の40%弱であり、最も少数であったE類型は10%にも満たなかった。A, D, Eの3つの類型の全体に占める割合は、本学の学生を対象とし、性格類型別のグループのサッカースキ

表2 性格類型別の人数の内分け

類	型						
	型	典型	準型	亜型	重型	軽型	
A 類	17人	A	4人	A'	4人	A''	9人
B 類	13	B	5	B'	2	AB	6
C 類	14	C	6	C'	1	AC	7
D 類	30	D	10	D'	11	AD	9
E 類	8	E	1	E'	6	AE	1

ルの学習能力を調べた結果⁵⁾と類似したものであった。これに対し、B類型は10%強減少し、C類型は逆に10%弱増加していた。

スキルテストについては、各週の前後3回ずつの試技のうち、最も優れた記録を結果の集計に採用することとした。ポイントからはずれた長さによって、5点から1点までの5段階で得点化したが、その基準は次のとおりであった。すなわち、ショート・サービスでは、19cm以下を5点とし、20cmから29cmまでを4点、30cmから39cmまでを3点、という具合に10cm間隔で得点化し、50cm以上を1点とした。また、ロング・サービスの得点化分類基準は、39cm以下が5点、40cmから59cmまでが4点、以下20cm巾で3点、2点とし、100cm以上が1点であった。

表3は被験者の8回分の得点を合計し、類型別の平均値と標準偏差を示したものである。それぞれの類型間の差の検定を行なったが、いずれの類型どうしにも有意差は表出されなかった。

表3 性格類型別の平均値と標準偏差

性格類型	人数	ショートサービス		ロングサービス	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
A	17	22.57	6.85	22.88	5.30
B	13	21.77	4.66	20.85	5.79
C	14	24.00	4.41	22.86	6.49
D	30	21.37	5.74	22.20	5.44
E	8	23.38	4.97	22.00	5.00

性格特性を表わす因子について、高得点群と低得点群の記録の差を調べたが、表4に示されたとおり、有意差が顕現されたのはわずかに1例で、ショート・サービスでの(R)因子のみであった。江口¹⁾によれば、(R)因子の高スコアのもの「気軽、軽卒、向うみず」の特性をもち、逆に、低スコアのもの「慎重すぎて決断力が弱い」と特徴づけられる。これに従えば、今回の結果から「慎重で決断力に乏しい質」のものは「気軽で、軽卒で、向う

表4 性格因子の高得点群と低得点群の平均値と標準偏差

性格因子	人数	ショートサービス			ロングサービス		
		平均値	標準偏差	t-値	平均値	標準偏差	t-値
D	12	22.50	3.84	0.1148	20.75	6.17	1.4036
d	42	22.29	5.99		23.45	5.65	
C	21	22.43	5.40	0.0269	21.48	5.66	0.7515
c	40	22.48	6.14		22.68	5.91	
I	17	23.00	5.51	0.8396	21.29	5.60	0.0625
i	31	21.67	4.94		21.40	5.44	
N	18	22.94	4.58	1.1769	21.06	5.46	0.9837
n	35	21.26	4.98		22.60	5.23	
O	15	23.47	4.95	0.6621	21.20	5.67	1.0165
o	26	22.15	6.48		23.23	6.20	
Co	16	23.31	4.75	0.3500	22.19	4.89	0.0851
co	34	22.74	5.59		22.32	5.29	
Ag	23	22.87	5.44	0.7678	22.47	5.67	0.1299
ag	31	21.74	5.09		22.26	5.92	
G	13	22.92	6.28	0.4379	23.92	4.14	1.6693
g	21	22.05	4.94		20.81	5.65	
R	34	20.35	4.98	☆☆ 2.9227	21.27	5.20	0.3274
r	17	25.18	6.28		21.82	6.42	
T	47	21.81	5.84		22.55	5.39	1.3440
t	12	22.00	2.92		20.25	4.40	
A	32	21.94	5.39	△ 1.8475	21.75	5.88	0.8935
a	13	25.31	5.50		23.46	5.21	
S	45	21.49	5.39	△ 1.8743	22.07	5.63	0.6254
s	13	24.85	6.24		23.23	6.36	

※性格因子の大文字が高得点群，小文字が低得点群
☆☆ P<0.01 △ P<0.10

みずの質」のものよりバドミントンのサブスキルの学習能力が優れている、といいかえることができよう。

有意差こそ認められなかったが、ショート・サービスにおいて、(A)因子と(S)因子でも(R)因子と同様に低スコアのものの方が高スコアのものに比較して優れている傾向が示された。一般に、(Ag), (G), (R), (T), (A), (S)の因子については、体力、運動能力の優れているものの方が高スコアを示すという報告²⁾³⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾が多く、この逆の結果を報告した例は皆無である。

今回のサービススキルの学習因子として、空間関係の認知能力、調整力、運動の正確さなどがあげられる。¹⁰⁾運動

能力の優れたものはこれらの能力も高いと考えられるのが妥当であろう。そこで、これまでに報告された結果²⁾³⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾と符合して、(A), (S), (R)の因子については、有意差が顕現されないまでも当然スコアの高いものが低いものよりも記録的には優れているであろうとの予測がたてられる。しかし、今回の結果は全く予想に反するものであった。この結果が特殊なものであるのか、あるいは、かなり一般的なものであるのかについては、今後も対象者を殖やすなどして同様のスキルテストを実施して究明していきたい。

次に、スキルテストの結果を4週ずつの前半と後半に分けて、高スコアと低スコアの2群間の記録の差を検定してみた(表5, 表6参照)。ショート・サービスでは、(R)因子は前半・後半ともに低スコアのものが有意に高スコアのものよりも優れており、(A)因子では前半にのみ同様の結果が表出された。スキルテスト全体の検定では有意差が認められなかったロング・サービスでも(表4参照)、前半で3例の有意差が表出された。すなわち、(D)因子と(O)因子では、低スコアのもが高スコアのものよりも優れ、逆に(T)因子では高スコアのもが低スコアのものに比較して優れていた。これらの結果は、江口¹⁾の示す性格特性に従えば、(A), (D), (O), (T)因子の順に次のようにいいかえることができよう。「引込思案で指導者意識が弱い」ものは、「指導者意識をもち自己顕示欲が強い」ものよりも優れ、「楽観的で自己満足している」ものは「虚脱感がありやる気を失っている」ものよりも優れている。また、「常識的で現実主義」のものは「現実ばなれした考え方」の持主と比較して、「のんきで安易に妥協しやすい」ものは「些細なことを気にしすぎる」ものに比較してスキル学習能力に優れている。

ショート・サービス、ロング・サービスの区別なく、学習の前半で有意差の認められた因子も、(R)因子の場合を例外として、いずれも後半では有意差が表出されなかった。学習の後半には性格特性による差が顕現せず平均化してくる理由については、今回の結果だけでは分析が困難であるので、今後の究明課題としていきたい。

要 約

本学1年男子学生82名を対象とし、バドミントンのサブスキルと性格特性の関係を明らかにしようとした。分析の結果は次のようにまとめることができる。

(1) (R)因子得点の低いもの、すなわち「慎重すぎるほど慎重で、決断力の弱い」ものは、因子得点の高い「気軽に軽卒で向うみずの質」のものに比較してショート・サービスの場合に学習の前後半を問わず、ねらったポイントへ落す能力に優れていた。

表5 ショート・サービスにおける性格因子の高得点群と低得点群の前後半の平均値，標準偏差およびt値

		ショートサービス					
		前半			後半		
性格因子	人数	平均値	標準偏差	t値	平均値	標準偏差	t値
D	12	11.17	2.41	0.4442	11.33	3.35	0.2712
d	42	10.67	3.60		11.62	3.11	
C	21	11.05	2.94	0.2872	11.38	4.01	0.3448
c	40	10.78	3.72		11.70	2.99	
I	17	10.59	3.40	0.3299	12.41	3.73	1.3385
i	31	10.23	3.19		11.13	2.74	
N	18	10.83	2.75	0.3863	12.11	3.65	1.4697
n	35	10.49	3.18		10.77	2.75	
O	15	11.47	3.03	0.7050	11.93	2.89	0.3836
o	26	10.62	3.94		11.54	3.21	
Co	16	11.44	2.62	0.2117	11.88	3.26	0.2069
co	34	11.24	3.30		11.68	3.04	
Ag	23	11.22	3.46	0.7478	11.65	3.46	0.4740
ag	31	10.55	2.97		11.23	3.27	
G	13	11.62	4.11	0.7943	11.31	3.45	0.0942
g	21	10.62	2.97		11.43	3.58	
R	34	10.06	3.11	☆ 2.0969	10.38	3.02	☆ 2.5137
r	17	12.41	3.60		12.77	3.34	
T	47	10.43	3.24	0.3221	11.17	3.69	0.0686
t	12	10.75	2.24		11.25	2.89	
A	32	10.47	3.26	☆ 2.4934	11.47	2.98	0.6712
a	13	13.08	2.70		12.23	4.19	
S	45	10.13	3.22	1.4165	11.36	3.09	1.3763
s	13	11.62	3.43		12.85	4.22	

☆P<0.05

(2) ロング・サービスの場合は，性格特性とスキルとの間に有意な関係は認められなかった。

(3) しかし，学習段階を前半と後半とに分けてみると，ロング・サービスの場合でも，前半に限って(D)，(O)，(T)の因子とスキルとの間に有意な関係が表出された。すなわち，「楽観的自己満足」のものは「虚脱状態にあってやる気をなくしている」ものに比較して優れていたし，「常識的で現実主義的」なものは，「現実ばなれた考え方をしている」人よりも優れていた。また，「のんきで安易に妥

表6 ロング・サービスにおける性格因子の高得点群と低得点群の前後半の平均値，標準偏差およびt値

		ロングサービス					
		前半			後半		
性格因子	人数	平均値	標準偏差	t値	平均値	標準偏差	t値
D	12	8.33	3.50	☆ 2.6709	12.42	3.97	0.6347
d	42	11.74	3.91		11.71	3.11	
C	21	9.19	3.28	△ 1.6902	12.29	3.77	0.6619
c	40	10.98	4.13		11.7	2.90	
I	17	10.18	3.85	0.1783	11.12	3.51	0.3897
i	31	9.97	3.75		11.48	2.76	
N	18	9.17	3.24	1.6676	11.89	3.48	0.2863
n	35	10.97	3.86		11.63	2.84	
O	15	8.80	2.93	☆ 2.1572	12.40	3.46	0.7299
o	26	11.58	4.33		11.65	2.83	
Co	16	10.19	3.36	0.1017	12.00	3.06	0.0291
co	34	10.29	3.37		12.03	3.29	
Ag	23	10.26	3.34	0.0854	12.22	4.00	0.1299
ag	31	10.36	4.31		11.90	2.93	
G	13	11.39	3.13	1.3937	12.54	2.24	1.2217
g	21	9.71	3.40		11.05	3.89	
R	34	10.35	3.68	0.3497	10.91	3.29	1.0039
r	17	9.94	4.28		11.88	2.97	
T	47	11.30	3.59	☆☆ 3.0248	11.26	3.16	1.0159
t	12	7.92	2.50		12.33	3.47	
A	32	10.00	4.05	1.1596	11.75	3.20	0.0188
a	13	11.54	3.67		11.77	2.42	
S	45	10.29	3.91	1.3698	11.78	3.43	0.5000
s	13	12.00	3.86		11.23	3.38	

☆☆P<0.01 ☆P<0.05 △P<0.10

協しやすい」特性のものは「些細なことを気にしすぎる」ものよりも優れていることが認められた。

参考文献

- 1) 江口恒男：性格診断マニュアル，25—26，株式会社テクノ，東京，1976。
- 2) 太田和義，原田碩三，新畑茂充：学生の体格，運動能力，血液型と性格との関係について，名古屋市立大学教養部紀要，57—69，23，1977。

- 3) 太田和義, 新畑茂充: 高校生の体格と体力の関係, 名古屋市立大学紀要, 25, 1979.
- 4) 太田和義: 性格特性とバドミントンのサーブスキルの関係, 日本体育学会第32回大会号, p.235, 1981.
- 5) 小原史朗, 太田和義: 性格類型別グループのサッカースキルの学習能力について, 愛知工業大学 "研究報告" p.37-42, No.15, 1980.
- 6) 直塚鉄太郎: 中学校期の主として体型, 性格より見たる運動能力の特性について, 体育学研究, 14(5), 71, 1970.
- 7) 野口義之: 運動選手の性格特性についての研究, 体育学研究, 2(5), 1957.
- 8) 徳永幹雄, 橋本公雄, 千綿俊機: 学生の体格・体力・性格の相互関係, 体育学研究, 16(2), 109-113, 1971.
- 9) 戸村博之: 児童の運動能力と心理的特性に関する研究, 体育学研究, 23(2), 173-181, 1978.
- 10) 松田岩男: 現代スポーツ心理学, 170, 日本体育社, 東京, 1967.

(受理 昭和57年1月16日)